

今年の4月8日、吉本新喜劇の同期で借金取りの子分役などで数々の舞台に出演していた山田亮さんが旅立ちました。新喜劇の魅力は、いわゆる「弱点」とされがちな個人の特徴を堂々と笑いに変え、それがむしろその人らしさとして輝くことにあります。役者たちは、自分をネタにしながらも、決して卑屈になることはなく、むしろ「それが自分であること」を誇らしげに演じています。そこに、観客は笑いとともに安心を感じる

⑥ 3人目の恩人



大阪成蹊大准教授 福岡亮治

山田さん、大きな心の支えでした

のです。そして、山田さんも関西弁がなかなか習得できないことを逆手にとり、広島弁を生かしたキャラクターで、「許してやったらどうや？」というイントネーションが不自然なギャグで笑いをとっていました。

当時19歳だった私にとって、社会人経験を持つ3歳年上の元ホテルマンの山田さんは、「何でも知っている大人のお兄さん」そのものでした。本当の兄のように親しくしてくださり、暇さえあればもう一人の同期芸人と3人で遊んでいました。「肉は買えないから」と、工夫しながら冷凍庫にあった餅とチーズだけで焼いた「モチースお好み焼き」。今でも

ふと思い出して食べたくなりまふ。みんなお金はなかったけど、夢だけはたくさんありました。山田さんの家に入り浸り、バカ話に笑い転げながらも、将来を真剣に語り合った日々。あの時間を私にとって最高の青春でした。

私が新喜劇の脚本を担当することになり、25年ぶりに再会しました。お礼を伝えると、山田さんは笑いながらこう返してくれました。「何を言ってるんや。楽しくてお礼を言いたいののはこっちやで」。あの頃と変わらない、やさしくて頼れる「大人のお兄さん」のままでした。

重ねた経験は、教育の世界で役に立つ。生きた教材になりなさい」と背中を押してくれた島田紳助師匠。そして、3人目が山田亮さんです。どんな時でも安心して相談できる存在で大きな心の支えでした。山田さんがいなければ、もっと早く芸人を辞め、今の私はなかったと思います。まだまだ山田さんの深い愛情には及びませんが、あの時していただいたことを思い出しながら、私も後輩や周りの人たちと関わっていきたくたいです。心からご冥福をお祈りいたします。

私には、芸人時代に出会った大切な恩人が3人います。1人目は、大学退学を考えていた時に、「絶対にやめたらアカン」と強くアドバイスしてくれた里見まさと師匠。2人目は、芸人と教育の道に悩んでいた時に「芸人として積み